

雪氷写真館⑥ 立山 雪の大谷・雪の壁/
20m-high snow walls of Mt. Tateyama.



写真 1 雪の大谷・雪の壁 (2006 年 5 月 8 日).



写真 2 雪の壁中の黄砂層.



写真 3 雪の大谷全景.



写真 4 雪の壁 (2006 年 6 月 18 日).



写真 5 雪の壁 (2006 年 7 月 31 日).



写真 6 雪の大谷全景.



図 1 雪の大谷付近の地形 0-200 m.

立山 雪の大谷・雪の壁

春の立山というともまず思い浮かべるのは雪の大谷・雪の壁で、立山黒部アルペンルート上の富山県立山有料道路の室堂平（標高 2450 m）のすぐ手前に位置する。アルペンルートの 4 月中旬開通のため 2 月より美女平（標高 975 m）から除雪が進められるが、その最大の難関が雪の大谷で、長さ 500 m におよぶルート上最大の吹きだまり区域である。立山は世界でも有数の豪雪地帯として知られるが、雪の大谷は高さ 20 m に達する雪の壁を間近に見ることができるため、国内はもとより海外からも多くの人々が訪れる名所となっている。

写真 1：2006 年 5 月 8 日の雪の壁。平成 18 年豪雪の年で壁の高さは最大で 19 m に達した。雪の壁には、冬季の気象状況を反映して、しまり雪層、氷板、汚れ層（黄砂）等の多くの層構造が見られる。密度は下層で $450 \sim 500 \text{ kg/m}^3$ に達し、スコップもささらないほど硬く圧密されている。写真左側の雪の壁中で層が大きく屈曲しているが、これは吹きだまりの影響が特に大きい区域を示す。（冬季の卓越風は写真後ろから手前に向けて吹く。）

写真 2：雪の壁中に見られる黄砂層。黄砂のほとんどは、上空に飛来した際に降雪に伴い雪層中に取り込まれ、貴重なタイムマークとなる。

写真 3：雪の大谷の吹きだまり地域全景。

写真 4：2006 年 6 月 18 日の雪の壁。層構造は保存されていて、雪面から融雪が進んでいることがわかる。また、壁が開かれると側面からの融雪も進む。

写真 5：2006 年 7 月 31 日の雪の壁。高さは 2 m 程度となり 8 月中には消雪する。20 m の積雪が一夏で全て融解するのも雪の壁の大きな特徴である。

写真 6：雪の大谷全景（2007 年 8 月 10 日）。卓越風は写真右から左へ吹く。矢印の尾根の風下側に吹きだまりが形成された様子が残雪状態からよくわかる。

図 1：雪の大谷付近の地形。楕円で囲んだ地域が雪の大谷の吹きだまり区域。

図 2：雪の大谷・雪の壁の 4 月中旬開通時の高さの変化。10 年間の平均は 16.5 m。最大は 2000 年の 20 m で最小は 2007 年の 14 m。平成 18 年豪雪の 2006 年は 19 m に達した。（資料：富山県道路公社）

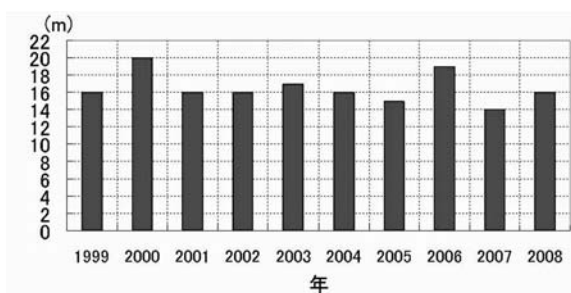


図 2 雪の大谷・雪の壁の高さ

飯田 肇 会員
(富山県立山カルデラ砂防博物館)